

## 「神様の正体見たり」 ローマ5：6～8

## I 導入部

おはようございます。11月の第三日曜日を迎え、今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝です。第一礼拝は、中高生の人と礼拝をささげました。

テレビドラマや映画では、ヒーローものが数多くあります。初めから正体がわかっているものもあれば、なかなか正体がわからないというものがあります。スーパーマンやスパイダーマンは誰なのかというのは、映画の中では、一般の人々にはわかりません。映画を見ている私たちにはわかるのです。

刑事ドラマでは、犯人が最後までわからないというものがあり、ハラハラドキドキという感じです。刑事コロンボという古いテレビドラマは、最初から犯人がわかっていて追い詰めるというストーリーです。古畑任三郎というドラマも犯人が最初からわかっていました。水戸黄門は、最後に助さん、格さんが印籠を片手に、「ひかえおろう。この紋所が目に入らぬか。ここにおわすお方をどなたと心得る。ここにおわすは先の副将軍、水戸光圀侯であらせられるぞ。頭（ず）が高い。控えおろう。」と越後のちりめん問屋ではなく、正体をばらすのです。その正体がわかり、悪代官たちは、ひかえるのです。

「相棒」という刑事ドラマがあります。杉下右京という人物が、推理によって犯人像に迫っていくのです。私は、この「相棒」というドラマが大好きでよく見ています。犯人である人の語った言葉を主人公が覚えていてその言葉が犯人逮捕につながるのです。その犯人の言葉を覚えていて、きっとこの言葉が犯人逮捕につながるのではないかと考えながら、推理しながらドラマを見て楽しんでいきます。相棒の説教題でお話ししたこともありました。

来月は、クリスマスです。子どもたちにとっては、サンタさんがプレゼントを持って来てくれるのが楽しみです。しかし、サンタさんはいないので、お父さんがサンタ役になってプレゼントを持って来てくれるのです。「ママがサンタにキスをした」という歌があります。サンタはパパだという歌です。バレバレなのです。でもほほえましい歌です。

さて、私たちは、聖書を通して、神様の正体を見たいのです。聖書に示された神様の正体は何か。今日は一緒に見てみたいと思います。今日は、ローマの信徒への手紙5章6節から8節を通して、「神様の正体見たり」という題でお話し致します。

## II 本論部

一、神様が最初に私たちに愛された

6節には、「わたしたちがまだ弱かったころ」という言葉があります。詳訳聖書という聖

書には、弱かったという言葉が「自分自身でどうする力もなかった時」と訳しています。リビングバイブルには、「**私たちが逃れる道もなく、全く窮地に陥っていた、まさにその時**」とあります。それは、私たちが創造された魂の親である神様から離れた存在、それを聖書は罪というのですが、神様から離れた人間は、弱い存在なのです。あの放蕩息子は、父親から奪い取るようにしてもらった全ての財産を使い果たし、飢饉のために何も食べる物がなくなり、死を目前にした放蕩息子のように、自分自身でどうする力もないのです。

神様から離れた人間は、逃れる道もなく、窮地に陥った存在なのだと言聖書は語るのです。そのような罪のある人間、罪を持ち、自分ではその罪をどうすることもできない、罪に押しつぶされてしまう人間、自己中心で神様に目を向けようとしない者、愛の神様を信じない者、神様を無視した者、そんな者のためにイエス様は死んで下さったのです。

私たちが、私たちの存在が神様の前にふさわしいから、あるいは、私たちがイエス様が死ぬのに値する存在であるから、死んで下さったというのではなく、私たちが弱かったころ、私たちが罪の中に沈んでいた時、私たちが罪にまみれていた時、私たちが罪を犯し続けていた時、私たちの存在が神様の前にどうしようもない存在の時に、イエス様が十字架で私たちの身代わりに死んで下さったのだと言聖書を通して、神様は宣言しているのです。

なぜ、私たちに対してそこまでして下さるのか。それは、神様が愛だからです。神様のご性質は愛だからです。礼拝の冒頭で読まれたヨハネの第一の手紙4章10節には、「**わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償うけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。**」と記されています。リビングバイブルには次のように記されています。「**この神様の行為によって、私たちは、何がほんとうの愛か、知ることができました。真の愛とは、神様に対する私たちの愛ではなく、私たちに對する神様の愛なのです。それは、私たちの罪を責める自らの怒りをなだめるために、神様がひとり息子を差し出された愛に尽きるのです。**」

私たちの存在そのものが、どのように悲惨であり、罪にまみれていようとも、神様は愛なので、愛そのものなので、私たちが愛して、私たちが罪から救うために、イエス様は人間の世界に来られ、私たちの罪の身代わりに十字架にかかって死んで下さったのです。そのことが、神様が私たちが愛しておられることの確かな証拠なのです。神様が何の分け隔てもなく、私たち一人ひとりを愛しておられるという事実を知り、神様に愛されていることを信じて感謝したいと思うのです。

## 二、神様は愛される価値のない者を愛された

8節を皆さんと共に読みましょう。「**しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」6節では、「**わたしたちがまだ弱かったころ**」と表現してありますが、8節では、はっきりと「**わたしたちがまだ罪人であったとき**」と示しています。罪人であるということは、先ほどお話したように、私たちが創造されたお方、魂の親である神様を無視した生き方、神様のまなざしが注がれているのにもかかわらず、無視し続けた私たち、「**神様なんか、私の人生に必要ななどまったくくない**」と、神様に向けて唾を吐くような、そのよ

うな罪の中にいる時、イエス様が、私たちの、その罪の身代わりに十字架で死んで下さったという事実により、神様が私たちを愛しているということが明らかにされたのです。

線路に落ちた人を助けるために、身代わりに亡くなった方のニュースはあります。また、海や川で流される子ども助けるために身代わりに死ぬ親の話はあります。愛する子どもの身代わりに、車に引かれた親の話もあります。生徒のために身代わりになる先生の話もあるでしょう。愛する者のために、大切な人のためには、自分が身代わりになって、自分の命を差し出す人がいるのは事実です。けれども、罪人のために、自分に対して不正や罪を犯し、傷つける者、痛めつける者のために、自分が身代わりに命を差し出すということは、まずないでしょう。アメリカでは、銃での乱射事件が後を絶ちません。ついこの前、アメリカの教会で、牧師の子供、教会の信徒の方々が銃撃されるという事件はありましたが、その犯人の身代わりに、牧師が身代わりに命を投げ出して死ぬということはありません。同じ命ではありますが、愛する者、大切な者のためには、命を差し出しても、人を殺す者、人を痛めつける人のために、自分の命を差し出す人はいないのです。それが現実です。

しかし、罪人のために、憎たらしい者のために、犯罪を犯し続ける者のために、神様を神様と認めない者、「**神様の存在なんかあるもんか**」と笑い飛ばす者のために、イエス・キリスト様は死なれたのです。そのわたしたちがまだ罪人であった時と同じように、十字架の上で苦しめられたイエス様をバカにし、侮辱し、鼻でセセラ笑う者たちのために、イエス様が進んで、ご自分の尊い命を投げ出されたのです。これこそが、神様が私たちを愛していることのしるしなのです。私たちは、十字架を見上げるたびに、十字架を思うたびに、神様が私を、あなたを愛していることを感じたいのです。自分のような罪深い者、人に迷惑をかけ続けている者、そのような私を、あなたを愛していると、十字架が証明しているのです。十字架を通して、神様の愛が私たちに示されたのです。

### 三、神様はイエス様の十字架で愛を示された

私たちは、出エジプト記を通して、モーセがシナイ山において、神様から10の戒め、十戒を与えられたことを知っています。教会学校では、毎週、十戒を暗記して唱和しています。私も教会学校で十戒を覚えました。とても大切なみ言葉です。

ところで、「**犬の十戒**」という本があります。犬といつも一緒にいる調教師の人が書いたものです。ペットブームと言われて、多くの人が犬や猫、うさぎなどを飼っています。けれども、小さい時はかわいいのですが、だんだん大きくなって、年を重ねて弱くなると放棄する人もいます。また、犬や猫を虐待する人もいます。この犬の調教師の人は、安易に飼ってすぐに放棄したり、虐待したりする人々に、犬の気持ちになって調教師の方が書いた本です。

たとえば、このようなことが書かれています。「わたしは十年から十五年しか生きません。ですから、ほんのわずかの時間あなたと離れるのもつらいのです。そのことをよくわかったうえでわたしを飼って下さい。」

「わたしを長時間しかったり閉じ込めたりしないで下さい。あなたには仕事があり、楽しみがあり、友だちもいるでしょう。でも、わたしには、あなたしかいないのです。」

「わたしをたたく前に思い出してほしい事があります。わたしの牙は、あなたの手の骨を噛み砕く力があります。けれども、わたしはそれをしないと決めています。」

「わたしが死ぬ時、言ってほしくない言葉があります。「ああ、かわいそう。私のいない所で逝かせて（死なせて）あげて。私はそれを見たくないから。」と言わないで下さい。わたしはあなたと一緒にいたいのです。あなたがもし、そばにいてくれたら、わたしはどんなことでも、容易に、受け入れることができますと思います。」

犬の調教師は、犬の気持ちが理解でき、かつ人間の言葉を話すことができます。この調教師が人間と犬との仲介者となって説得しているのです。一日の中で、ほとんど一緒にいる調教師は犬の気持ちがわかります。また、調教師は人間なので人間の言葉が理解できる。両方の事が理解できるので、両者の間をとりなすことができます。

イエス様は、100パーセント神様でした。神であるイエス様が人間の姿で現れて下さったのがクリスマスです。イエス様は100パーセント人間となって下さったのです。100パーセント人間となられたイエス様は、人間の弱さやもろさや足りなさ、肉体的な弱さや限界を、その他いろいろなことがわかるお方です。理解しておられます。その人間の弱さが十分に分かった上で、また、神様の深い愛を知った上で、私たち人間の罪の身代わり十字架で死んで下さったのです。

神様から離れた人間は、罪人ですから、何が正しい事で、何が悪い事なのかがわからないのです。そんな人間のために、イエス様は十字架の上で、罪の赦しのとりなしをして下さったのです。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」(ルカ23:34)と。

イエス様は、ご自分の命に代えてでも、ご自分の命を差し出してでも、罪の中にいる私たちを救いたいと願われたのです。そして、ご自分の命を罪人である私たち一人ひとりのために捨てて下さったのです。投げ出して下さったのです。なだめの供え物となって下さったのです。ヨハネの第一の手紙4章では、「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償うけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」と記しているとおりです。

### Ⅲ 結論部

イエス様の十字架での死、身代わりの死、恐ろしいまでの、極限の苦しみは、私たち罪ある人間の罪のさばきであったのです。父なる神様は、十字架でのイエス様の苦しみを見て、流された血を見て、身代わりに差し出された、その命を見て、つまりその死を見て、神様の人間の罪に対する怒りが、裁きの思いが取り除かれて、私たちの犯した過去の罪、今現在犯し続けている罪、将来犯すであろう全ての罪を赦されたのです。これが、神様が私たちを愛しているという証拠なのです。愛のしるし、愛の証拠なのです。神様の正体見たり。それは愛なのです。イエス様は死んで終わりではなく、死からよみがえり、復活の望みを私たちに与えられたのです。死んでも生きる命、永遠の命を与えて下さったのです。神様が、私たちを愛していることを感じる1週間でありたいと思うのです。